教員の資質能力の向上を図る人材育成について
～　協働型主体的課題解決学習推進チームさがの取組を通して　～

佐賀市立昭栄中学校
校長　永田　康子

はじめに

佐賀市は、佐賀県の東南部に位置し、北部地域は脊振山系の山ろく部の山林や清流、1200年程前の奈良・平安時代の肥前の国の行政府跡「肥前国庁」があり豊かな自然と長い歴史がある。

中心部は幕末から明治期にかけ、現在の日本に大きな影響を与えた偉人の足跡や明治期の日本の近代化を先導した「幕末維新期の佐賀」の歴史遺産である長崎街道や佐賀城公園等が多く残っている。

南部地域では、筑後川にかかる昇開橋や佐賀平野に広がるクリークや田園風景、豊饒の海といわれる「有明海」等素晴らしい環境に恵まれている（写真１）。

（写真１）

近年、佐賀市はＣＣＵ（Carbon dioxide Capture and Utilization）事業をはじめ、”バイオマス産業都市さが”として、環境の保全と経済の発展を両立する取組で「廃棄物であったものがエネルギーや資源として価値を生み出しながら循環するまち」を目指しており、環境先進国からも注目されている。

佐賀市教育委員会は「ふるさと『さが』を協働でつくる個性と創造性に富む人づくり」を基本目標とし、一人一人が活躍し、豊かで安心して暮らせる「さが」を目指して、家庭、地域、企業等、学校等のそれぞれの立場において連携・協働し、社会全体の教育力の向上に力を入れている。

また、佐賀市では目指す子ども像を「ふるさとを誇りに思い愛着を持つ心情をもつ子ども」「基礎学力をもつ子ども」「倫理観・社会常識を持つ子ども」と設定し、佐賀市立小中学校（小学校35校、中学校18校）はその実現に向けて、地域に根差した特色ある学校づくりを推進している。地域とともにある学校の実現に向けて、コミュニティ・スクールの設置についても増加傾向にある。

１　主題設定の理由

「Society5.0時代」の到来等、大きな時代の変化が生じている中で、教職員はこれまでにも増して主体的に学び続けていくことが必要となってきている。令和３年中教審答申で示された、「『令和の日本型学校教育』を担う教職員集団の姿の一つとして、変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて学び続け、子供一人一人の学びを最大限に引き出し、主体的な学びを支援する伴走者としての役割を果たす」ことが挙げられている。

そこで求められるのは、教職員としての個別最適な学びと協働的な学びである。また、「公

立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針」（令和４年８月31日改正）では、教員の学びについて「教員等の資質の向上を図ることは、児童生徒等の教育を充実することに他ならない。児童生徒等の学びと教員等の学びは相似形となることが重要であり、個別最適な学び、協働的な学びの充実を通じて、『主体的・対話的で深い学び』を実現することは、児童生徒等の学びのみならず、教員等の学びにもまた求められており、児童生徒等の学びのロールモデルとなることが期待されている」とある。

時代の変化に応じて、それぞれの教員には、成長段階に応じた資質・能力を身に付け、その個性伸長や学力向上を図ることがなお一層求められている。そのためには、これまでのような知識・技能の習得はもちろんのこと、自己の個別最適な学びとの往還を意識しながら、他者との対話や振り返りを行う等協働的な学びが必要になる。これまでも校内研修や授業研究等を通して教員としての学びの場が設定されてきているが、学校の規模や環境はそれぞれに異なっている。また、校内研究の内容もそれぞれの学校の状況によって様々である。

令和６年５月現在、佐賀市立中学校（18校）に勤務する県費の常勤教職員は約550人である。これらの教職員が「令和の日本型学校教育」で求められる力をつけるために主体的に学び続けるには、安心して学ぶことができる環境や業務の調整等が必要である。

佐賀市中学校長会では、佐賀市内中学校勤務の教員が、今後新たな教職員の姿として求められる十分な指導力を身に付け、将来的には、組織の一員として、主体性に学校運営に参画するための研修の機会を設定することが人材育成する鍵であると考えた。

そこで、本校長会では「教職員の指導・育成」について佐賀市教育委員会と連携を図りながら、教員の資質能力の向上を目指すことをねらいとし、本研究主題を設定した。

２　研究の視点

生徒が主体的で協働的に関わり、個に応じた個性伸長、学力向上における個別最適な学びの場を展開するために、市内の中学校における協働的な学びの取組状況を把握し、校長会及び教育委員会との連携を図る。そして現状から、それぞれの学校で実践や課題をもとに教員が共に学んでいくことができる環境を整えることが重要と考え、以下の視点を設定した。

（１）「協働的な学び」を推進する。

（２）教育委員会と連携し、「令和の日本型学校教育」で求められる教員を育成する。

３　研究の実際

(1)　「協働的な学び」の推進

ア　「協働型主体的課題解決学習推進チームさが」での取組

本校長会は、教員が学び合う「協働型主体的課題解決学習推進チームさが」（以下「協推さが」）を研修の場として設定した。各学校の校長から推薦された教員及び希望する教員が参加し、年間５回の研修会を行った。研修場所は、初回は成章中学校、２回目以降は佐賀市教育委員会の研修室で開催した。研修会の内容は以下の通りである。１回目、これまで協働的な学びを牽引して実践してきた校長の講話と各教科での座談会。２回目、佐賀市教育委員会の指導主事による講話と各教科での実践報告及び現状についての話し合い（写真２）。３回目、４回目は授業とそれについての振り返り。最終回の５回目では、各教科での課題と改善に向けた話し合い及び今後に向けての話（写真３）。本研修は、校長会主催の研修であるため、時間は勤務終了後の18時から20時までとした。

（写真２）

（写真３）

各学校から参加した教員は延べ300人であった。生徒が主体的で協働的に学ぶ授業実践を目指し、「協働的な学び」の視点からそれぞれが抱えている課題を解決しようと毎回熱心に研修に参加する教員の姿が見られた。「協推さが」の研修に参加した教員は、研修したことを日頃の授業にいかしながら実践し、他の実践者の授業を参観することで自身の取組を振り返ることができている。この研修を通して、「協働的な学び」を実践することができる教員が育っていると思われる。以下は研修会に参加した教員のアンケートによる感想である。

○　社会（模擬授業）は新鮮でした。課題設定や単元計画等参考になる点が多々ありました。文章で表現する課題も取り入れていきたい。

○　自分も協働的な学びを柱に据え、授業実践を行っているが、なかなかうまくいかないこともある。この研修を通して、授業の大きな流れを含め、学びを深めるポイント、生徒たちへの声掛け等自分自身にとって大きな学びとなった。

○　ファシリテーターとしての役割や50分の使い方、評価の仕方等参考になることが多くあった。

○　模擬授業に参加して、実際に生徒役になってみると、教員のファシリテーターとしての声掛けのタイミング、内容等がいかに重要であるかが分かった。改めてこの部分を考えていきたい。

○　協働的な学びを実践するうえで、「一人も見捨てない」「みんなで伸びる、みんなで高まる」ことに本気で取り組みたい。

○　なぜ学ぶのかをきちんと説明できることが大事だということに大いに共感した。学校ではこれをテーマに話し合います。

イ　公開授業の実施

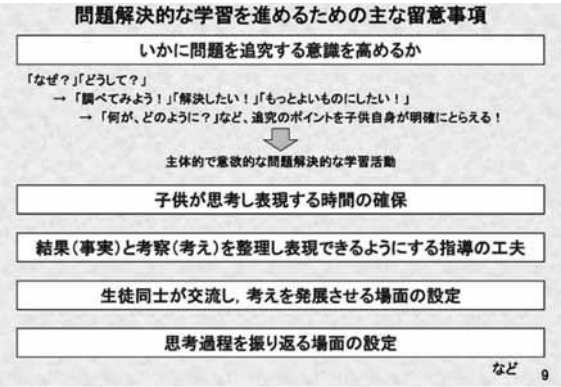
本市内で「協働的な学び」を校内研究の柱に据え先進的に実践している学校の授業を「佐賀市中学校校長会研究・研修委員会かんたん授業参観」として随時公開した。各校の校長が、公開授業について教員に周知し、一人でも多くの教員に授業を参観させ、研修の機会を与えるために、教頭及び教務主任に時間調整等を任せ、校長から積極的に参観するよう教員に声掛けを行った。教務と時間割の入れ替えを相談し、教頭に確認する等して主体的に参観しようとする教員の姿が見られるようになった。「協推さが」の研修会に参加している教員だけでなく学ぶ意欲のある教員は積極的に参加した。

（ア）金泉中学校での取組

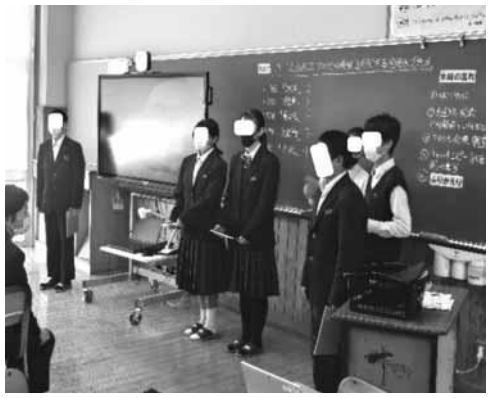
金泉中の校内研究の主題は「『自己変容が分かり、よりよく学ぼうとする意欲を高め

る評価法の改善』―妥当性・信頼性のある評価を目指して―」と設定され、３回６提案授業が公開された（写真４）。

授業の構成は、従前から文部科学省で提唱されている「問題解決的な学習（問題発見・解決を念頭に置いた深い学び）」（図１）に則って実施している。



（図１）



（写真４）

本市校長会の「協働的な学び」は、上図のとおり問題解決的な学習の中に含まれており、以下の３点を授業参観の視点として設定し、研究協議が行われた。

・観点別（３観点）評価の方法や対象は適切だったか。
・生徒自身で自己変容が分かる振り返りができていたか。
・支援を要する生徒への手立ては有効だったか。

研究の成果としては、

○　問題解決（プロジェクト）型の単元を全単元で行うと、教科書単元を完了するのが難しい。１年生は単元に軽重を付けて問題解決型で全単元を行い、２年生は全単元をコンパクトな問題解決型にした。

○　生徒同士で評価ができるように評価基準を設定し、相互評価に取り組ませることができた。

等が挙げられた。

また、同校では、年度当初に実施した全学年集団規準に準拠した標準学力検査で、全国基準を有意に下回っていた。別検査ではあるが、年度末には全学年共学力が向上し、県平均を若干上回る水準まで向上した学年もあった。校内研究や「協推さが」での研修を通して、生徒が主体的・協働的に関わる授業を実践する教員が育ち、確実に教員の指導力が向上していると思われる。

金泉中学校の校内研究を進めるにあたり、幅広い見地から研鑽を積み、取捨選択しながら教員としての職能的成長を果たしていくための機会となっている。

このような他校の取組を知り、実際に授業を参観することで、教員は一斉授業と生徒が主体的で協働的に関わり合う授業の違いを実感することができた（写真５）。授業参観後は、授業者に質問したり、生徒たちに質問したりしながら自身の授業実践を

（写真５）

振り返るよい機会となった。

特に若手教員には、多くの知識習得と経験を積み、自ら考え、気づくことで資質・能力の向上につなげさせたいと考える。

ウ　研究発表会への参加

令和５年11月19日（日）に佐賀市立東与賀中学校で「確かな学力の育成に向けた授業づくりの研究～『学び合い』の視点を取り入れて～」をテーマとした研究発表会が行われた。東与賀中学校は本研究の実践を牽引してきた中心校であり、校内研究として『学び合い』を柱に、協働的な学びを実践している。

（ア）研究目標

一人も取り残さない主体的な学びの実現に向けて『学び合い』を柱とした授業展開を行い、確かな学力の育成に向けた授業改善を行う。具体的には、学習指導の共有化、各教科等の指導と評価の工夫、学習環境の整備、各種検査の活用、提案授業の準備と研究会の実施に取り組む。

（イ）教員の変容

「協働的な学び」（東与賀中学校では『学び合い』）の実践を通して教員の生徒観察の視点が以下のように変容した。

○　誰もが課題に向かっており、課題解決、めあて達成のために一生懸命頑張っている姿が見られる。学びに向かう姿勢は大変すばらしい。

○　各クラスに１～３人は全体を見渡し、授業をファシリテートできる生徒がいる。そのため、固定グループを超えたつながりが見られる。一人も見捨てないでみんなで伸びる、高まる雰囲気がある。

○　一斉講義型授業では、学びについていけない生徒が発生するが、『学び合い』だと他者との関わりの中で、自分に合ったペースで課題に向かうことができ、個別最適な授業につながる。

（ウ）生徒の変容（写真６）

授業の振り返りは以下の通りである。

○　自分も誰かに教えたり説明したりできるようになりたいから、できるだけ予習をしたい。

○　課題が終わっていない人に教えに行くだけが『学び合い』ではなくて、その周りで課題が終わった人同士でもう一度確認したり、納得できるまで話し合ったりするのもいいと思う。

（写真６）

○　いつも聞いてばかりだけど、自分が理解するだけでなくて、自分の方法で誰かに説明できるようになりたい。

教員だけでなく、生徒の学びに対する視点も一斉授業では得られないものである。本研究発表会へも多くの教員が参加し、研修の機会とした。

（2） 教育委員会と連携し、「令和の日本型教育」で求められる教員の育成

ア　教育委員会との連携

「協推さが」の研修場所として、２回目以降は教育委員会の研修室を借用した。研修会場の準備等についても教育委員会指導主事等の協力を得ることができた。また、「協働的な学び」をこれまで実践してきた教育委員会の指導主事に講話を依頼した。講話（写真７）では、１回目の研修会に参加した教員からの質問をもとに、授業づくりのポイントや考え方、留意点等が具体的に示され、参加した教員の「協働的な学び」に対する理解が深まった（写真８）。

R5.0824 「協推さが」第2回研修会

第1回研修会参加者の感想を分類すると・・・

1	授業構成	どれだけ話すべきか？	・・・ＰＰ
		中1の初歩の段階でどのような授業をするとよいか？	・・・別紙
		介入のタイミング、ポイント、任せる部分のバランスは？	・・・ＰＰ
		教科別の実践例／授業実践の例	・・・教科別ワークショップで
		授業での目標設定方法（全員ができる方法）	・・・ＰＰ
		まとめは全体で共有しなくていいのか？	・・・ＰＰ
2	声かけ	ワークに進みたい生徒に対して	・・・ＰＰ
		関係ないおしゃべりをする生徒に対して	・・・ＰＰ
		写し合いにならないようにするためには？	・・・ＰＰ
		子ども同士をつなぐ声かけとは？	・・・ＰＰ
3	学力	計算量は大丈夫なのか？結果につながるのか？	・・・ＰＰ
		ワークシートの作り方は？	・・・教科別ワークショップで
		テストの点数アップのためには？	・・・教科別ワークショップで
		低学力の子の救い方は？	・・・教科別ワークショップで

（写真７）

（写真８）

イ　佐賀市教育研究所との連携

佐賀市では、小学校・中学校の教員で研究組織を作り、当面する課題および生徒指導・教育相談について研究し、その成果を毎年度報告している。令和６年度は、国語部会、算数・数学部会、協働的な学び部会の3部会を立ち上げている。本研究所は佐賀市教育委員会が主催し、それぞれの部会に校長が顧問となり、研究所員は各５名である。協働的な学び部会については「協推さが」に参加した中学校教員を中心に構成されている。

本研究所は、教員の研修及び授業や学級経営をサポートするために研究所員の実践研究のために研修場所を提供し、研究所だより「木漏れ陽」の発行を通して市内すべての学校に情報提供を行っている。また、年度のまとめとして発表会を行ったり、研究紀要・資料を作成したりしている。

本研究所と校長会が連携することで、教員の学びの場が確保され、より多くの教員に「協働的な学び」について情報を伝えることが可能になった。

４　成果と課題

（1） 成果

ア　「協働的な学び」の推進

（ア）本校長会が「協推さが」を教員の研修の場として設定することで、教員が安心して学び合える環境を提供することができた。「協推さが」に参加した教員はお互いに情報を交換したり、教材を共有したりしながら自身の授業を改善することができた。

教材共有については、佐賀市教育委員会の共有フォルダ（佐賀市内全教員の校務用パソコンからアクセス可能、教科・領域等別、学校別にフォルダが設定されている）に各自が作成した教材等を自由に保存、活用できる仕組みとなっている。

（イ）「協働的な学び」を先進的に実践している教員の授業をいつでも公開したことで、より多くの教員が日ごろの授業の様子を参観することができた。研修で得た知識とともに生徒たちへの声かけ、タイミング等の感覚的なことも学ぶ機会となり、特に公開授業後

の授業者との意見交換会では見取りの直観力の向上にもつながったとの声を聞くことができた。

（ウ）「協働的な学び」の取組先進校の研究発表会では、すべての授業で生徒たちが主体的に協働的に関わり合う姿があった。異教科合同授業や異学年合同授業等も含め、参観した多くの教員が「協働的な学び」の可能性を感じていた。多様な授業スタイルの創造により参観者からは、生徒一人一人の思考及び判断の時間を確保、または保障することを重視しなければならないことや、個と個や個と集団をつなぐことで個の思考の活性化、高度化、または課題解決における判断材料の精選や判断時間の効率化は、授業者と全生徒ではなく、生徒同士の協働性の向上により授業における自己有用感や自己肯定感の高まりを見取ることができ、いわゆる「分かる授業」「居心地の良い楽しい授業」を構築していくうえでは最も重視しなければならないことと感じた等の声が聞かれた。

イ　教育委員会と連携し、「令和の日本型教育」で求められる教員の育成

（ア）研修場所を教育委員会が提供することで、確実に場所の確保をすることができた。また、教員は指導主事による講話を聴くことで「協働的な学び」についての知識を得ることができた。

（イ）校長会主催の「協推さが」を市教育研究所が引き継ぐことにより、「協働的な学び」について実践研究を進めることができている。また、研究所員の５名は今後も佐賀市中学校のリーダーとして、佐賀市の学校教育を牽引していくと大いに期待している。

（2）　課題

ア　「協働的な学び」の推進

校長会のメンバーが毎年替わることから、この取組が短期的なものにならないよう、目的を見失わず研究推進し続けていく必要がある。また、「協推さが」では、研修時間を平日の勤務時間外としていた。今後の研修の在り方としては「働き方改革」とのバランスを考慮すべき課題である。

イ　教育委員会との連携

現在、教育長をはじめ教育委員会から本校長会の取組には理解と協力を得ているが、人の入れ替わりによって認識が変わることもあるため、常に情報交換をしながら目的を共有していく必要がある。また、教育研究所の令和６年度以降の「協働的な学び部会」を、次にどのような形で引き継いでいくのかも課題である。

5　終わりに

大きな時代の変化の中で、教員に求められる資質・能力も変化し、変化を柔軟に受け止めながら学び続けていくことが不可欠である。

本研究を通して、児童生徒の「協働的な学び」と「個別最適な学び」を授業場面における実践と具現化が経年的な課題であったが、「協働的な学び」と「個別最適な学び」にアプローチする授業を実現できる教員の育成の在り方について、その方向性も見えてきた。今後も、校長会として、教員の研修の機会を保障することはもちろんのこと、教員同士をつなぎ、協働しながら学べる環境、教員が自身の個性を発揮し、安心して実践できる環境を作っていきながら、これからの教育を担っていく人材育成を目指していく。最後になるが、この研究の企画・運営、各学校での実践研究の推進を潜在的に支えることとしてはトップリーダー集団の学校教育に対する夢と希望、そしてロマンを常に持ち続け、その具現化のための方策を対話により見出し、

自校の実態に応じた学校経営に取り入れていくこと、さらには他校の実践、研究成果を自分事、自校事としてとらえ、校長会の一員として推進していくことを今まで以上に大切にしていきたい。

【参考・引用文献】
1　「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」（答申）令和３年１月26日　中央教育審議会
2　「改正教育公務員特例法に基づく公立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針の改正等について」（通知）令和４年８月31日文部科学省
3　文部科学省初等中等教育局教育課程課、「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」（令和３年３月版）